学　年	教科等	題材名	日　　時
第１学年	図画工作科	カラフル　いろみず	令和６年２月９日(金)

１　本時の目標

色水をつくるときの感覚や行為をとおして、色等に気付くことができる。

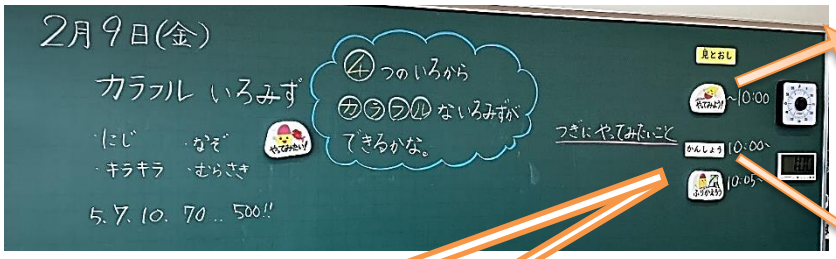
２　指導過程

学習活動及び学習内容（★は評価にかかわるもの）	「自律的に学ぶ」ための手立て
１　題材と出合い、本時の学習について話し合う。 ○　「カラフル」について ・「いろいろな色があるということだよね。」 ・「虹みたいな感じ。」 ○　題材のめあて ４つの色から、カラフルな色水ができるかな。	○　カラフルという言葉に着目させ、「絵の具は４色しかないけれど、みんなのアイデアでカラフルにできるかな。」と尋ねることで、「いろいろな色をつくりたい」等の思いをもつことができるようにする。
２　本時の見通しをもつ。 ○　色水のつくり方 ・　事前にペットボトルに、使いたい量の水を入れておく。 ・　ペットボトルキャップの裏に、綿棒で絵の具を付ける。 ・　キャップを閉めて、ペットボトルを振る。	○　「どんな色になるかな。」と尋ねながら、色水づくりを実際にやってみせることで、「やってみたい」という思いをもつことができるようにする。
○　本時の見通し ・　活動→鑑賞→次時の活動のイメージ	○　活動形態は指定せず、個人でするか、仲間と協力するか等を自分で選択できるようにすることで、次々に変化する自分の思いを大切に活動できるようにする。
３　色水をつくる活動をする。（★） ○　色水をつくる活動 ・「赤と白を混ぜたら、ピンクができたよ。いちごミルクみたい。」 ・「全部混ぜたら、どんな色になるのかな。」　等 【２色以上混ぜた色水】 ・「大きいペットボトルで、水をいっぱい使うとどうなるかな。」 ・「きっと、大きい方が薄い色になると思う。」　等 【水の量を変えた色水】 ○　色水をつくるときの感覚や行為をとおした、色への気付き ・「見て。下から見たら、きらきらして綺麗だよ。」 ・「上とか横とか、違う方向から見ると、どんな色に見えるかな。」　等 【下から見た色水】	○　子どもの状況を見極めながら、以下のように言葉かけをすることで、子どもが活動し続けることができるようにする。 自ら声をかけてくる子どもがいたとき　または、子どもの気付きやイメージを確かめたいとき ・「素敵だね。どうやってつくったの。」 ・「なるほど。いいね。これからどうするの。」　等 仲間の様子を見ているだけの子どもがいたとき ・「○○さんの色、素敵だよね。気になるよね。」　等 ※　自ら仲間とかかわろうとしている場合は、見守る。 活動のねらいから逸れているように見えたとき ・「今、どんな感じなのかな。」　等 ※　仲間とかかわっているうちは、見守る。 することがないと感じていたとき ・「この色いいね。どうやってつくったのか教えて。」 ・「ここまで、どんなことができたのか教えて。」　等 やりたいことができないと感じていたとき ・「○○さんがやっていたかも。見ておいで。」 ・「何をしているのか聞いてみたらどうかな。」 ・「先生にできることはあるかな。」　等
４　鑑賞をし、次時の活動のイメージをもつ。 ○　自分や仲間のつくった色水の鑑賞 ・「カラフルだね。たくさんの色水ができたね。」等 ○　次時の活動のイメージ ・「もっとたくさんの色をつくりたい。」 ・「○○色をつくってみたい。」 ・「みんながつくった色を、全部並べたい。」 ・「ジュース屋さんごっこをしたい。」　等	○　鑑賞する時間を設定し、仲間のつくった色水に目を向けさせたり、新たな材料（透明のプラスチックコップ等）を提示したりすることで、「次は○○してみたい」という思いをもつことができるようにする。 ○　次時では、つくった色水を使ってどのようなことができそうかを尋ね、左記のような発言と活動中の気付きとを結び付けながら価値付けることで、次時の活動のイメージをもつことができるようにする。

3　本時の評価規準

水や絵の具の量を変えたり、絵の具を混色したりしながら色水をつくるなかで、たくさんの色等ができることに気付いている。（知識・技能①）【行動観察・行動分析】

4　板書等

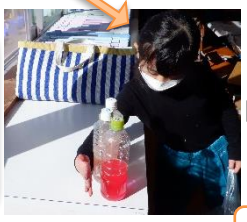


色水をつくる活動

ペットボトルを並べて、ガムテープでくっつけて、虹色にしたい。

次時の活動のイメージ

透明の水に色水を近付けると、違う見え方がするので、もっとやってみたい。



鑑賞

5　指導講評

宮崎県　教育研修センター　水田　幸児　指導主事

- 学びを調整する力を高めるには、教師が授業の全てをコントロールするのではなく、子どもに学習の進め方を選択するチャンスがあることがポイントである。本時でいえば、「一人でするか、グループでするか」「材料はどうするか」や「場所はどこでするか」と、子どもに選択するチャンスが、たくさんあったことがよかった。
- 学習の進め方を自ら選択できるようにするためには、「ゴールの姿」を教師と子どもが共有し、学習の動機付けを行い、見通しをもたせておくことが大切である。造形遊びをする活動においては、導入でイメージの方向付けを強くしてしまうと、イメージ先行で造形活動が進んでしまう。本時は、「どんな色になるかな。」と、「材料」に視点がいくように導入していたところがよかった。
- 「言葉かけ」については、今後検討してほしい。「活動が終わっていると感じている場合」や「活動を思い付かない場合」を想定した言葉かけを準備することは大切である。加えて、言葉かけの役割を「本時のねらいを達成するため」であると考えるなら、次のような言葉かけが考えられる。

「何になりそう」でイメージを膨らませる。
「離れてみたら」「違うところから見てみたら」と空間や場を含めた活動になるようにする。
「どんな感じ」と感覚や気持ちにつなげる。
「他の人の活動の様子も見てきたら」と新しい発見や学び合いにつなげる。

「空間」や「場」の視点、「学び合い」の視点は、学習の最後の「ふりかえり」の視点や、教師の評価とも関連してくると考えられる。

宮崎大学　幸　秀樹　教授

- できたものをきっかけに、新しい出来事が起こったり、思いもよらないものがその場で生まれてきたりするような姿を引き出せると、図画工作科のねらう子どもの姿が出てくるのではないかと思う。色をつくるだけではなく、色水に変えるという意味を考えてほしい。

6　考察

① **材料選びや場の設定、活動形態の工夫**…絵の具やペットボトル、水等といった材料の準備を十分にしておいたことで、子どもは思い付いたことを、次々と試すことができた。教室だけではなく、屋外や図工室等、活動場所を広げることも検討する必要がある。

② **「やってみたい」と思える導入の工夫**…これまでの知識や経験を基に、子どもが「できそう」という思いをもつことができるような尋ね方をしたり、実演したりすることで、子どもは見通しをもち、活動し始めることができた。低学年は、特に材料との出合わせ方が重要である。

③ **ねらいを達成するための教師の言葉かけの工夫**…「どうやってつくったの。」と、子どもの気付きやイメージを確かめながら言葉かけをした。例えば、「青だけでつくった。」という子どもがいたときは、「〇〇さんも同じようにつくったんだって。同じ色になっているかな。」と比較させるような言葉かけを行うことで、「こっちの方が薄いね。」等と、色の違いに気付かせることができた。教師が何に気付かせたいのかを明確にしたうえで、子どもの発言をよく聞き、共感したり助言したりする必要がある。

④ **活動を次（次の時間、次の題材、日常生活）につなげるための工夫**…鑑賞の時間に、全員の色水を、後方や窓際の棚の上に並べさせると、日の光が当たる窓際に置きたがる子どもの姿が見られた。「場」の視点を与えたことは、新たな色への気付きを促すために、有効だったと考えられる。